

関西学院神学部における

朝鮮人学生入学関係書類の分析（一九一三―四三年）

李 徳周

（訳） 朴 賢淑

一、序

本論文は、関西学院大学神学部の神田健次教授の研究チームが提供した（旧制）関西学院神学部の入学関係書類を検討し、一九一〇―四〇年代の神学部に入學した朝鮮人学生の留学の背景とその動機を考察することに目的がある。そのために、まず入学関係書類の種類と内容を分析してその特徴的性格を考察すると共に、信仰告白的な内容が含まれた「伝道動機明細書」を分析し、朝鮮人学生の信仰と入学動機を調べていくことにする。

二、入学関係書類の分析

関西学院入学関係書類は、個人もしくは時代によって多少違いがあるものの、基本的な書類と

して、入学願書と履歴書、在学証明書もしくは卒業証明書、最終学校の成績証明書、推薦書などが要求され、その他にも身元保証書もしくは財政保証書と伝道動機明細書、健康診断書、戸籍謄本、写真などが添付されている。資料が確認できる朝鮮人入学生六七人の状況を整理し、〔表1〕入学年度別朝鮮入学生一覧にまとめた（28頁）。

表を見ると、はじめは朝鮮の名前で登録を行っていたものが、皇民化が進みその統治がクライマックスに至った一九四二年以降には創始改名をして日本名で登録していることがわかる。そして、推薦書をはじめは朝鮮で牧会している牧会者や宣教師などが主に書いていたが、日本帝国の末期に当たる一九三七年以降には日本の牧師たちによるものが増え、一九四〇年代には日本人牧師たちの推薦書だけが添付されている。

一九二〇年代までは、入学生のほとんどが朝鮮で学業を終え、関西学院神学部の入学を目的に渡日したケースが多かったが、一九三〇年代に入ると、早くから日本に渡って日本の学校を卒業した者や日本で就職をした後、神学部に入学したケースが増えている。また、入学生の所属教団も様々で、はじめは朝鮮教会の出身者が殆どを占めていたが、一九三〇年代末からは在日朝鮮人教会や日本基督教会に出席している者が増えている。

(1) 朝鮮人入学生の年度別現況（表2）入学年度別朝鮮入学生氏名（33頁）

朝鮮の入学生が一人もいなかった年度もあったが、殆ど毎年朝鮮の学生たちが入学し、最も多かった年度は一九四三年の八人である。一九二五年と一九三七年にもそれぞれ七人が入学している。

(2) 志願学科〔表3〕学科別朝鮮人学生 (34頁)

朝鮮で高等普通学校 (中学校) を卒業した後に入学した学生たちは、別科もしくは予科に入学し、卒業後に牧師または牧会の経験がある者は本科に入学できた。朝鮮で聖書学院もしくは神学校を卒業した者は本科一年、または二年に入学できたものの、長い牧会経験があった李浩彬牧師の場合は聴講生として登録している。科と学年は入学生の神学と語学 (日本語と英語) 能力に応じて融通をきかせて調整していたと考えられる。

(3) 出身地域〔表4〕出身地別朝鮮人学生 (34頁)

出身地域は全国に分かれている。平壤を含む平安南道が一五人と最も多く、次いで平安北道一〇人、黄海道七人を含めると計三二人に達するが、彼らはいわゆる日本の弾圧の中にもキリスト教が成長し続けた「西北地域」の出身である。次いで、「畿湖地方」の京城 (三人) と京畿道 (一人) の出身が一四人であり、忠清以南地域は少数である。もちろん、ここに表記された出身地はあくまで出身地であって、入学する以前、彼らの活躍していた活動の根拠地を考慮すれば、より多様であり、国内はもちろん国外の満州地域まで及んでいる。

(4) 入学当時の年齢〔表5〕年齢別朝鮮人学生 (35頁)

最高年齢はイエス教会の宣道監であった三八才の李浩彬牧師であった。次は三六才で入学した玄垣國 (元梨花女子大学、玄永学教授の父親)、三四才の金英珠牧師と金靈淳牧師であった。彼らは教師、牧師の経験者であり、経験が長い経歴者として神学の「延長教育」の次元で関西学院

神学部に入學した。最年少で入學したのは一八才の金龍玉であり、平壤の光成中学校を卒業してすぐに日本留學を志した。最も多い年齢層は高等普通学校と専門学校（もしくは神学校）を卒業してから留學し入學した学生たちで、二三―二四才であった。

(5) 性別〔表6〕男女別朝鮮人学生（36頁）

男子学生が大多数を占める中、女子学生は一九三七年に入學した金永雲と一九四〇年に入學した車閔福の二人である。社会的、教会的に女性の牧会がまだ開放的でなかった当時の状況で、女子学生たちの神学修行は挑戦的な性格を持つものであったと考えられる。特に、金永雲は海州の高等女学校を卒業し、殷栗公立普通学校の教師として勤務した後、関西学院神学部の聴講生であった李浩彬牧師の推薦を受けて入學し神学教育を受けた。一方、車閔福は京城女子商業学校と満州龍井の光明師範学校を卒業してから日本に留學し、大阪ランバス女学院の神学部を終えてから、本科二年に入學している。

(6) 教派及び教団的背景〔表7〕教派及び教団別朝鮮人学生（36頁）

関西学院が南監理会宣教部関係の学校であったことから、朝鮮の入学生も南監理会出身者が最も多い。これに北監理会及び一九三〇年南北監理教会が合同して以後の朝鮮監理会に所属していた者も合わせると、監理教出身が三七人で最も多く（五五％）、次いで長老派出身が一八人（二七％）であった。監理教出身の学生たちは、南監理教系統の松都高等普通学校、北監理会系統の培材高等普通学校と光成高等普通学校、尚洞青年学院の卒業生、そして南北監理教聯合の監理会神学校

卒業生が多かった。また、エキュメニカル(超教派)的に運営された皮漁善記念聖書学院と中央基督教青年会学館、聖潔派系列の京城聖書学院の出身者も志願している。しかし、長老教会出身者の中には当時、朝鮮長老教会の唯一の教団神学校であった平壤の長老会神学校出身ではなく、長老派系列の嶺南中学校、長・監聯合の崇実専門学校と延禧専門学校を経て関西学院に留学するケースが大多数であった。これは保守的な神学を教えていた平壤神学校出身者が関西学院神学部を志願することは容易でなかったためであり、したがって比較的自由な神学を教えていたカナダ合同教会の宣教師たちが活動していた咸慶道と東満州地域を背景とした長老教会の出身者(玄垣國、李泰俊、宋昌根、金春培、金英珠、嚴堯燮など)が関西学院を志願していた。

特に、興味深いのは一九二〇～三〇年代に保守的な長老教会から「異端」とされていたイエス教会所属の牧会者や伝道師が関西学院に相当数入学している点である。イエス教会は、一九三〇年代に朝鮮教会の代表的な神秘主義的リバイバル運動家として知られる李龍道(一九〇一～一九三三年、彼は一九二八年に関西学院神学部に入學した李龍九の兄に当たる)を中心として、一九三三年に組織された土着教会の一つである。李龍道牧師の死後、イエス教会中央宣道院宣道監(監督)として教会を率いていた李浩彬牧師が一九三六年に本科聴講生として関西学院に入學した後、彼の推薦を受け金永雲、韓俊明などが入學した。また、所属は監理教会であったものの、李龍道牧師やイエス教会と密接に関係していた邊宗浩も予科生として入學して修學した。特に、金永雲は韓国解放後、梨花女子大学教授として勤めていたが、文鮮明の統一教会に積極的に参加し(初期運動)、韓国キリスト教会に大きな衝撃を与えた。同じく、日本植民地下の当時に、既成教会から「異端の取り扱い」を受けていた教派である朝鮮基督教教会出身の学生(李順相)も関

西学院に入学したことがわかる。朝鮮基督教会は、一九一〇年代に根本主義神学を強調する宣教師たちが支配する牧会と神学教育政策を批判していた金庄鎬牧師を中心に設立された自由主義神学伝統の土着教会であったが、この教会の反宣教師的な性格が一九四〇年代に入り反欧米的な日本基督教会の「東洋的基督教運動」に接木されて、日本政府の皇民化政策を積極的に支持する「親日」路線を取るようになった。そのような脈絡から朝鮮基督教会の牧会者たちの日本留学への道が開かれたのだと推測される。一九三〇年代以後は、在日朝鮮基督教会に出席する学生たちの入学が増えているが、これは渡日してからキリスト教信仰を持つことになったケースと考えられる。一九四〇年代には日本基督教団に所属する学生が増える傾向が見られるが、既に創始改名をした入学生の中に、日本と朝鮮との狭間にある民族的相違を感じ取ることはできない。

(7) 推薦者〔表8〕推薦人別朝鮮人学生（37頁）

推薦者は入学志願者が出席していた朝鮮国内所属教会の牧会者が最も多く、教派別では南監理会に所属する牧師が多い。次いで北監理会、そして一九三〇年代南北監理教会が合同してから後の朝鮮監理教会所属の牧会者とメソヂスト神学校の教授が多くを占めている。しかし、長老派出身の入学生も相当数を占めていた関係上、朝鮮イエス教長老会の牧師たちによる推薦も多かったが、興味深いのは保守的な平壤山亭峴教会の朱基徹牧師が一九三八年に入学した金耀信の推薦書を書いている点である。当時、朝鮮で最も影響力の大きい牧会者の一人であった朱基徹牧師は、一九三八年以後、本格化される神社参拝強要政策に抵抗し、一九三八年以後数回投獄された後、一九四四年に平壤で「獄中殉教」したが、第一次投獄直前に平壤光成高等普通学校卒業生の金耀

信の日本留学推薦書を書いたと思われる。

さらに、関西学院に先に入学し勉強した在学生や卒業生の推薦を受け入学をしたケースもしばしばあったが、一九一〇年以前に修学した劉敬相牧師が数回推薦書を書いており、一九一八年入学生である金鐘萬牧師も後にメソヂスト神学校の教授として勤めながら、メソヂスト神学校卒業生の推薦書を書いている。そして、既に記したようにイエス教会の李浩彬牧師は聴講生として入学し修学しながら同じ教団出身の金永雲、韓俊明の推薦書を書いているが、韓俊明は一九三〇年代朝鮮キリスト教界で李龍道牧師に対する「異端の是非」が問われた際、神秘主義的集団行動の核心的な人物として知られた当事者であり、金永雲は韓国解放後の梨花女子大学教授時代に、文鮮明の統一教会の初期運動に賛同し、社会的に教会的に大きな衝撃を与えた人物である。

関西学院が南監理会とカナダ合同教会の宣教部が合同運営していた宣教部設立学校 (mission school) であったために、外国人宣教師たちの推薦も多く見受けられる。駐韓宣教師の場合、南監理会と北監理会宣教師が多数を占めており、咸慶道を主な宣教地域としていたカナダ合同教会宣教師たちによる推薦も多い。そして、長老派出身の入学生は推薦書を北長老教会と南長老教会の宣教師も書いているが、数はそれほど多くない。日本に駐在していた宣教師としては、唯一女子学生の車閨福を推薦したホワイトヘッド (M. Whitehead、ランバス女学院神学部長) が関連学校に進学する卒業生の推薦書を書いている。そして、日本人の教会牧会者たちによる推薦も相当数あるが、特に宣教師たちが帰国した一九四〇年代に入り、入学生は殆ど日本の牧会者たちによるものであった。このような日本の牧師たちによる推薦は、身元保証の性格も含むものであったが、一九一〇年代後半に朝鮮の留学生たちの推薦を数回行っている兵庫県松本益吉牧

師が注目される。また、日韓併合直後である一九一〇年代前半には、日本に派遣された朝鮮留学生の監督（囑託）李晩奎と旧韓国政府で官僚を歴任し併合直後に、日本政府から子爵の位を授かった趙重鷹は、本人はキリスト者ではなかったが関西学院入学生たちの身元保証を引き受けていたことから、初期関西学院への入学が政府次元の保証によるものであったことがうかがえる。しかし、このことは関西学院だけでなく、当時、日本に留学を志した朝鮮の学生一般に要求された条件であった。

(8) 最終卒業学校〔表9〕最終卒業学校別朝鮮人学生（39頁）

高等普通学校（後に中学校）卒業生が最も多く、商業学校と聖書学院（高等聖書学校）卒業生、大学（専門学校）の卒業生も多数含まれていた。一九三〇年代に入り、朝鮮の神学校（多数が監理会神学校）を卒業した多くの学生たちが関西学院神学部本科を志願した。一九四〇年に監理会神学校が総督府と「革新教団」の教育政策により閉鎖されると、関西学院に移り神学修行を続けたケース（金相稷、沈載哲）もあった。理由は確かではないが、日本に渡り京都の同志社大学と立命館大学に通っていたものの、両大学を退学した後、関西学院に入学したケース（李秋民）には疑問が残る。そして、一九四〇年代の入学生たちは、朝鮮からすぐ渡日して留学するよりは、日本で学び、職場生活を送ってから関西学院に入学するケースが多かったのである。

(9) 身分及び職業〔表10〕身分及び職業別朝鮮人学生（39頁）

関西学院入学前の身分としては、高等普通学校や神学校を卒業してすぐに入学した学生が最も

多い。次いで、朝鮮で高等普通学校を卒業しミッション・スクールに勤めた後、神学を勉強するため入学したケースが多い。また、キリスト系の機関と一般社会機関で勤めていた脱サラリーマンもいる。朝鮮で神学校を卒業し牧会に励んでいた牧師や伝道師もいたが、最高齢入学者の李浩彬牧師は、メソヂスト（監理教）神学校を卒業しメソヂスト（監理教）教会で牧師按手を受けた後、一九三三年李龍道牧師と共にイエス教会を創立、教団の責任者として活動していた中堅の牧会者であった。

三、朝鮮人学生の信仰と関西学院入学の動機

(1) 一九二〇年代― 高在鳳 宋昌松 鄭達元 張基洙

一九二一年に入学した高在鳳は、幼い時から母親と共に教会に出席していた。形式的な信仰生活を送っていただけであったが、一九一九年三月一日の独立運動を経験してから人の魂と心への関心が高まりキリスト教の真理を求めた。その結果、「宇宙万物が神の創られたものであり、人もまた特別な目的で創造されたことがわかった」。熱心に信仰生活をしていたある日、朝早く祈るために山に登り山頂で朝の景色を目にし、忙しく行き来している人々を見た。彼は、「その悪い霊に悩まされている兄弟を助けるために努める人がどれくらいいるだろうか？」と自答しながら、利己的な生涯を生きるよりは、「腐敗する世の中を変える意志がある人」として生きる決断をした。結局、彼は、①墮落した人を救い出すことが預言者の義務であり、②霊的生活を生きることが最高の生涯であり、③キリストの真理を学び、罪に落ちている兄弟を助け新たに生まれ変

わるこの世に天国を創ることが、「私たちの罪のためにゴルゴタの丘で血潮を流し死なれたイエス・キリストの恵みに答える道」であることを悟り、伝道者となる決心をした。

一九二四年に入学した金鐘弼は、儒教の家に生まれ一八才（一九一二年）の時、キリスト教に改宗して「主の血潮で罪の赦しを受ける」経験をし、「主の真理を悟り福音を伝えよう」と決断した。特に、「現在、朝鮮社会は物質文明が貧弱であると同時にその魂も非常に疲弊し、罪悪が満ちた暗黒の雲に包まれている」ことを嘆き、「物質文明よりはまず、朝鮮民衆の魂をリバイバルし、罪から救う魂の指導者を養成しようと決心した」。彼はこの世を「物質主義と霊的主義」との戦場と見て、「イエスの宗教は人の中にある魂が神と接し、感化を受けるとどのような山をも越えられ、どのような心も動かすことができるという不朽の真理が実際、証明されたもの」として、福音を伝えるべき理由を、①救われた者が隣人を救おうとするのは自然なことである、②恵みに応えるのが当然の義務である、③伝道は人生最大の事業であるため、④伝道をないがしろにすると天国建設が遅れるから、⑤魂の救いが信仰による力の源泉であるため、⑥人生の旗である十字架に従うと整理している。

一九二五年に入学した宋昌松は、六才の時から親と共に信仰生活をしたが、習慣的・惰性的であった。一九二三年六月、金益斗牧師のリバイバル集会に参加し、「自分の罪を悔い改め生涯をキリストの奴隷として生きる」決断をし、経営していた商売を整理し、一九二四年京城協成神学校に入学し、牧師になる準備をした。彼は神学の授業を、「実に一期一会の一大変動であると同

時に、神が下さった一新啓示」と思い伝道に励んだ。

一九二七年に入学した鄭達元は、メソヂスト教会鄭奉益牧師の長男として生まれ、幼い時から信仰生活をしながら「キリストの恵みを深く感じて」育った。父親の後を継いで牧師になろうと志した理由を、①信の意義を持つてキリストの真の命をあらわすため、②生きるにも死ぬにもキリストについて語り、キリストのために働くことでキリストが残された御業を成就するため、③退歩常態に処した朝鮮のキリスト界を変え現代の病的な社会をキリストに導くことで、宗教の時代を再び到来させるため、④羊飼いがいない羊のようにさまよう、つまり罪の波におぼれ滅び行く中でも、神の恵みを忘れ遠ざかっている全世界の人々の魂を救うためであると説明している。

一九二九年に入学している張基洙も、やはりメソヂスト教会張竹変の長男で、牧師になると決断した理由を、次の三つに分けて説明している。①国の衰退は民の道徳と密接な関係にあると前置きしてから、「現代社会は物質文明が極度に発達しているが、道徳的には腐敗した時代である」と定義し、「道徳が腐敗した時代に人類が健全な道徳性を養うためには宗教による他ない。宗教家になり健全な道徳性を養成し天国をこの世に建設するため」、②牧師の家庭に生まれ、「幼い時から宗教教育を受けたこと」、③キリストが教えられたように、「人類の本当の生はこの世にあるものではなく、あの世、すなわち神の国で永遠に生きることである」と考え、「自分一人だけ救われることに満足せず、自分の同胞にもこの真理を伝え、その魂を救うことで共に宇宙の人類全体に宣べ伝え永遠に生きる国に入ることが」伝道の動機であると記している。

以上、一九二〇年代に入学した学生たちの信仰と伝道の動機を総合的に整理すると、①多くの入学生たちはキリスト者もしくは牧師の家庭に生まれ、幼い時から信仰生活を送っていた。②はじめは形式的で習慣的な信仰生活の中で、ある契機を通して人生と宗教について深く省察し、キリスト教信仰に帰依することが最も尊い生であることを悟り、③自分が悟った真理を他人（同胞と人類）に伝えるという信仰的な義務感と、④道徳的に墮落した現代社会を救う唯一の道である宗教的な感化を追及し、地上に天国を建設するために、自分の生涯を神学と牧会に捧げる決断をした。霊的な個人の救いと道徳的な社会の救いの調和を見出すことができる。

(2) 一九三〇年代―朴泰鎮 李昌鎬 趙華哲 盧義善 李炳燮 邊宗浩 金永雲 韓俊明

一九三〇年に入学した朴泰鎮は、日本の名古屋享樂商業高校に在学中、キリスト者の同級生の「善行」に触れて改宗を決心し、神学校に入学した特別な例であった。彼は元山出身で、幼い時から教会に通ったことはあったが、信仰生活を中断し、キリスト教に関心を持たないまま過ごした。日本に留学し一九二九年四月、学友寺部悦次が下宿で病んでいる朝鮮の少年を看護していることを知った。少年は豊橋の工場に勤めていたが、解雇され、行くところがなくさまよっている内、寺部の下宿に入り、靴を盗もうとして捕まり、鞭打たれていたのを、寺部が仲裁し、職がみつかるまで部屋に泊め、病気で弱っている少年を誠実に看護していたのだ。それまで朴泰鎮は、教師に誘われ一年前から教会に再び通い出していたものの、依然、信仰に冷淡であった。しかし、朝鮮の少年に対し、国境と民族、階級を超え、互いに助け合い、真の平和を建設できる「キリストの超越的な愛」を実践する寺部の姿に接し、恥かしさと責任感を感じ、「寺部の手を握り

涙を流し折って、自分が病気の少年を引き取ることにし、言葉では言い表せない喜びを感じた。この経験から、「暗き人生が明るくなり、自分の幸せより多くの人々の幸せを望んで人類に奉仕しようとする志が湧き、友人や親の反対にも関わらず、生ける神、実践的な愛の所有者であるキリストの福音を、自分を含め多くの心が貧しい人、罪により苦しんでいる人、精神が腐敗した人々に宣べ伝えようとする堅い決断と覚悟で」神学校に入ったのであった。

一九三三年に入学した李昌鎬は、京城刑務所看守の息子として生まれ、養正高等普通学校に通い、青年期「魂の平安」のことで悩んでいる内、一九三〇年頃、「人生観に関する疑問がある先生にしたことから聖書を学ぶ」ようになった。聖書を読んでいくうちに、「イエスが三三年間の犠牲の実を結んで後、結局は赤い血潮を流し私の罪を清く流して下さったことで」、永遠の命を下さったことを悟り、「本当の平安を得た彼は、自分の命も神に捧げて」イエスの志を受け継ぎ、「この喜びの福音の知らせを伝え、世俗の罪で悩む魂にイエスを紹介すること」を決心した。このような背景から神学校入学を志願したが、「極度に疲れ、衰退した同胞の魂を救うため重い荷を背負いなさい、という神の声を聞き、安全な道を離れ、犠牲の道を行くこと」を決めた。

一九三四年に入学した趙華哲は、平南順川の未信者の家庭に生まれ、ミッシヨン・スクールである満州龍井の恩真中学校に在学中、新生の経験をし、一九二九年に受洗した。一九三一年、中学校を卒業してから故郷の小学校の教師をしていたが、それまで強く望んでいたが、進学できない自分の状況に悩み、不安、誘惑、絶望の深い沼に陥り、最後には生まれたことすら呪い、自殺

まで試みた。しかし、「危機一髪の瞬間に、愛の神が罪多い私を見捨てないで、マタイによる福音書一一・二八の御言葉によつて魂を動かして」下さった。「キリストの寄り所として」祈るようになった。すると、「聖霊の火が降りてきて罪で死んでいた命が蘇り、光と平和、満足、感謝が心に満ち、人生観と社会観が一変し、新天新地が開く」体験をした。この体験後、「復活の主、命の救い主、唯一の真理の道であり、愛のイエス・キリストとその福音を人々に伝えずにはいられなくなり」伝道者の道を選んだ。彼は、「キリストを受け入れた社会、国家、世界が天国であり、その以外には自由も、幸福も、真理もあり得ないと思う」ようになった。「十字架に掛けられたイエス・キリスト以外には何も認めないで、その福音を伝える事に全生涯を犠牲の捧げ物として捧げること」を決心した。

一九三五年の入学生盧義善は、平北鐵山の未信者家庭に生まれ、幼い時、「この世の万事が心に傷だけを与え、魂は暗い闇に陥り、死より苦しい苦痛と煩惱の罪惡から救われ、聖なる愛の世界に導かれ神の子となる栄光を得、天の神を『アバ、父よ』と呼べるようになった」。日々御言葉を与えられ、ソウル中央基督教青年会学館英語科に入り三年間修学した後、「滅び行くこの世に出て行き、過去の自分のように罪に苦しむ人々に神の愛、キリストの生命の福音を伝えるため」神学の道を選んだ。

一九三七年に入学した金永雲は幼い頃、一時友人と共に教会学校に通ったことがあったが、本格的な信仰生活はしなかった。海州公立高等女学校に在学中、「人生に対する疑惑と倦怠」で厭

世主義に陥ったが、「もし、この宇宙に神が存在するならこの疑惑を解いてくれるだろう」と思い、「ある日曜の夜、集会に出席し歌った讚美歌の歌詞に神に招かれている確信を持った。その時から教会に通うこと、祈ること、賛美と説教が魂の糧であることを知り喜びを感じた。そして、このような喜びと満足を得ていない人々に福音を伝えたいという思いを抱くようになった」。

高等女学校を卒業した一九三二年、日本メソヂスト海州教会で受洗し、「神学を学び、この尊い御業のため生涯を捧げる」決心をした。しかし、家庭の経済的な事情により金融機関に就職した。「日曜日は日本メソヂスト海州教会の教会学校で奉仕し、平日の六日間は肉の糧のため、それも他人のためでなく自分の給料のために働くことに苦しんだ」。結局、殷栗公立普通学校の教師となり、「担任していた七〇人の子供が真の人間になるよう祈りながら教え、日曜日は教会学校の生徒たちに直接、神の御言葉を伝え喜びと使命感を感じた」。

学生たちの家庭を訪問し伝道しながら、無牧の田舎の教会で礼拝を導く経験もした。農閑期には農村に出て夜学でハングルと聖書を教え、教会を平壤イエス教会に移し李浩彬牧師の指導を受けた。学校と教会の激務で健康を損ない、医師の休養を薦める言葉に、「休養するお金で神学勉強をする」ことを決心し、周囲の反対を押し切り、「神学を学ぶまでは決して死なずに、完全に健康を回復する」という確信を持って、関西学院神学部に入學した。

一九三七年に入學した嚴堯燮は、文川長老教会の嚴致相牧師の次男として生まれ、幼い頃からキリスト教の信仰教育を受けて育ち、「キリスト教社会事業を志し、延禧専門学校文科に入學したもの、修学中に考えを変えた。事業家はキリスト教真理の中に生きるよりは事業中心に生き

るので、生活上の矛盾がある」ということであった。「キリスト者は先ず伝道するのが使命である」と思い、「命が尊いことと、命のための事業が偉大であること」を悟り、「罪人として神の前に膝まずき、主の者となることを決心し」、神学校を志願した。

一九三七年入学の李炳燮は、黄海道のキリスト教の家庭に生まれ、幼児洗礼を受けた。はじめは「法律家として立身出世する希望を持っていたが」、ソウル長老教会系列の徹新中学に通う内に、「法律より宗教や哲学問題に大きな興味を持つと同時に、聖書や宗教関係の本を楽しむようになり、神とキリストに近づき、その真理を求めるようになり、宣教師と教会の信徒から神学の道を薦められるようになった。そのため、法律か神学かの進路問題で迷うようになった」。

ある日、「暗闇からイエスが悪魔に試された際、人がパンのみに生きるのではなく、神の口から出る御言葉によって生きる」という言葉と、「先ず、神の国と神の義を求めなさい。収穫するものは多いが働き人が少ない」との御言葉から勇気づけられ、まず、実践すべき成就されるべきものは神の国運動であることが分かった。「主に跪き、すべての罪を悔い改め、これまで持っていた欲望も計画も投げ捨て、主が与えられる限りの恵みを受け、主に服従することを」決心した。その結果、「罪の激しい波に揺れ動く多くの人々にイエスの福音を宣べ伝え、失われた羊を神に導くことを使命と考えるようになった」、神学を志すようになった。

一九三七年入学の辺宗浩は、平北宣川の初代キリスト者（辺達聖）の息子として生まれ、信仰生活をした。神学を目指した動機として次の三つを挙げている。①親は一人の子供に恵まれた

が、牧師を志願する者が一人もないことに対して、「七〇才の白髪の親が、『私の信仰が足りないのか、私たちの子供を神に捧げることはできないのか』と嘆くことに感動し、涙を流して牧師になること」を決心した。②生まれた時から虚弱体質で、二五才まで多くの病氣と戦い孤独を嘆くうちに、「生と死を通して人生をつかさどる神の恵みを体験し、奇跡的に健康を取り戻し（李龍道牧師のリバイバル集会に参席し、治癒の恵みを体験した）、二九才から再び修学し、五年間専門学校で学んだことに」感謝感激し、「言いあらわせない神の力、そしてその恵みをこの世に知らせ、人々に宣べ伝えることが使命であると確信し」、伝道者の道を歩むことを決めた。③特に、「朝鮮の教会は日々衰弱し、紛争が多くなりリバイバルし善導する必要がある」と感じていた最中、「朝鮮のキリスト教界にはキリスト教関係書籍と文学書が少ないことに気づいた。このことに特別な関心を持って、文書宣教の夢を広げるため神学校を志望した」。(彼は既に延禧専門学校在学中に出版社「心友園」を設立し、『李龍道牧師書簡集』、『李龍道牧師日記』などを出版している)。

以上、一九三〇年代の入学生たちの信仰と入学動機を考察したが、総合的にまとめると、①牧師もしくはキリスト者家庭に生まれ、幼い時からキリスト教信仰生活を送り、青少年期に将来の職業について悩んだ末、聖書研究もしくは祈るうちに、「神の意志」を悟り、神学校を志願したケース、②やはり、青少年期に肉体的・病的あるいは、魂と肉の平安を得る宗教体験をした後、福音伝道を自分の使命として認識したケース、③キリスト教的な環境に生まれ、信仰的な雰囲気の中で育った者たちが、一九二〇～三〇年代の朝鮮教会の世俗的・物質的で霊的に衰退した現実を直視し、失望・苦悩した末、「霊的覚醒」と「信仰更新」を通して朝鮮教会をリバイバルしようとする宗

教的責任感を抱いて入学したケース、④はじめは一般的な学問のため渡日したが、日本で福音に出会い、日本もしくは朝鮮の教会に出席する中で、日本人キリスト者の信仰生活、もしくは聖書と礼拝を通して宗教的な感化を受け進路を変え伝道者になる決心をしたケースが主であった。

また、既成教会からは「異端」審問を受けていた李龍道牧師と李浩彬牧師のイエス教会伝道者と信徒たちの「集団的入学」も、一九三〇年代の入学生の際立った特徴であった。

(3) 一九四〇年代―車閔福 星村徹男 文村基成

一九四〇年に入学した女子学生の子車閔福は、平南肅川で小学校に通っていた時、長老教会で受洗し、京城女子商業学校を経て一九三六年に満州龍井光明学校師範科を卒業し、日本に留学。大阪の日本メソヂスト東部教会に出席しながら、メソヂスト系列のランバス女学院神学部を卒業した直後、関西学院神学部に進学した。彼女は神学をするようになった動機を、「神の尊い恵み、十字架の血潮により完全な救いを受け、清められた」体験をして、「全生涯を神に捧げることを」決心し、「この喜びの救いを隣人に分け与えたい感激と感動を覚えた。そして、御旨に従い、最後まで神の国建設のため福音の良き伝道者として献身することを喜びと光栄と思い」、これこそ「私を救って下さった恵みに少しでも報いる道」と告白している。

一九四三年入学の文村（文）基成は、済州道のキリスト者の家庭に生まれ、「中学四年の時、『暗黒のアフリカ伝道者リビンストーン伝』、賀川豊彦の『死線を越えて』を読み、微力であるが殉教者の後に続き、伝道の業に生涯を捧げる」決心をした。

「だから、あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ二八・一九―二〇)、「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。(一ペテロ一・二四―二五)」という聖書の御言葉を讀み、「一生を神に捧げ伝道者となる決心を」した。「教会が危険にさらされた今日、依然として真理の前に忠実であるべきであり、人類はキリストによらないでは救いにあずかることができないため、世界をキリスト化することが神の国建設であることを」強調している。

一九四三年に入学した星村(李)徹男は、漆谷生まれで、一九二九年渡日し、布施の日新商業学校に通い、「心の煩悩で苦悩していた最中、姉の伝道で教会に出席するようになったが徹底ではなかった」。しかし、一年後、「イエスが本当に私のため十字架に掛けられ、私のように罪多い多くの人々のために死なれたことを悟るようになった。そのような主を思うと内臓が張り裂けそうな感じ」を受けた。「神学を勉強し、主のためその苦痛の一片でも担う」決心をした。毎朝早く四時半に教会で祈る内に準備し、教会の働きにも積極的に参加した。彼が関西学院に入學した頃、彼の同年代の青年の多くが「皇軍戦士」として戦争の犠牲となったが、そのような雰囲気を感じたように彼は、「大東亜戦争勃発と共に東亜諸民族の共存共栄の幸福のため、皇軍戦士は多くの犠牲を払い、海で、陸で活躍し、命をかけ奮戦している中で、私だけがここに残り安泰に過ごすのは良い事かと思ひ、福音を宣べ伝えることを使命と認識し、自ら重大な伝道の使命

を痛感し神学校の戸を叩いた」と述べている。

以上、一九四〇年代の入学生たちの信仰と入学動機を考察した結果、次のような特徴を見出すことができる。すなわち、①一九四〇年代の入学生は朝鮮から渡日後、すぐに関西学院に入学するよりは、既に日本に滞在していて中・高等学校、商業学校に通い、人生の進路について悩んだ末、牧師になる決心をして神学を志願した、②日本留学中、日本人教会に出席し、人生の進路に悩んだ末、聖書と祈りを通して牧師としての召命を受け神学校に進学した、③大東亜戦争の最後にあたる一九四〇年代「戦時体制下」に信仰生活と神学教育が政府の統制と監視を受けていた状況で、神学校入学生たちの信仰告白書に、「聖国建設」、「神国建設」、「聖戦」のような、時局的、表現がしばしば登場する。その内容から、同年輩の青年たちが出兵する時代に、宗教的な召命感を持って神学校に進学する実存的な苦悩が垣間見られる。そして、日本の神学校に入学する朝鮮人学生たちの苦悩は、政治的、日本人と民族的、朝鮮人の間のアイデンティティーに関わるものもあった。

四、結論

これまで一九二〇～三〇年代関西学院神学部 of 朝鮮人入学関係書類を検討しながら、その特徴的な内容を考察してきた。その結果、次の点を確認することができた。

まず、入学書類を検討した結果、朝鮮人学生たちの入学は毎年行われていたこと、その修学能

力に応じて本科、別科、予科、聴講など多様な課程に入学していたことがわかる。そして、入学原書に添付された多様な文書の中で、推薦書と身元（あるいは財政）保証の書類が重要な部分を占めていたが、推薦書は朝鮮と日本の宣教師や牧師、神学校の教授などが作成し、また関西学院卒業生や在学生の推薦も重く作用したことがわかる。関西学院がメソヂスト教会系列であったため、朝鮮人の入学生と推薦者はメソヂスト教会出身者が多かったが、長老教会出身者も相当数在学习し、日本基督教会及び朝鮮の既成教会から「異端」と見なされたイエス教朝鮮教会の出身者も多数入学していたことがわかる。

次に、入学生の信仰告白である「伝道動機明細書」を分析した結果、時代別に若干の差はあるものの大多数の入学生は、①キリスト者の家庭に生まれたか、もしくは幼い頃から信仰生活をしてきた。②青少年期に人生と職業、魂と将来などの問題で悩んでいた。③宗教集会もしくは、祈祷会などを通して、悔い改めと新生、魂の救いと平安を体験しながらキリスト教に真理を発見した。④このようなキリスト教信仰と真理を未だ知らない同胞と人類に宣べ伝えることで、この世に神の国が建設され、それが神の意志であると悟った。⑤伝道と牧会に献身しようとする目的で神学校に志願するようになった。一九三〇年代以後、入学した者の中には、以前のように朝鮮で学業を終えすぐに関西学院に入学するケースよりは、日本で信仰生活をするうちに神学を目指したケースが増加している。特に、朴泰鎮の場合のように、形式的な信仰生活を送るうちに、日本人キリスト者の学生が見せた「超越的な愛の実践」に刺激を受け、真実の信仰の座へと導かれ、神学に方向転換をすることもあった。日本帝国時代の植民統治下にあった朝鮮人が、日本人から受けた「超越的な」愛の代表的な例である。

〔表1〕入学年度別朝鮮人学生一覧

入学年度	氏 名	志願学科	出生地及び 出生年(年齢)	推薦人及び保証人	最終学校・ 経歴	所属教団
1913	韓石濬(男)	別科1年	平南順安 1899年(24)	朱孔三、 <u>李晩奎</u>	五山中学 馬山教会の 伝道師	朝鮮長老会
	金智煥(男)	別科1年	平北定州 1892年(21)	朱孔三、 <u>李晩奎</u>	五山中学・ 啓光学校の 教師	朝鮮長老会
	韓錫源(男)	本科1年	平南甌山 1894年(19)	崔炳憲	培材学堂・ 崇仁学校の 教師	北監理会
1914	金義衛(男)	本科1年	平北龜城 1895年(19)	朱孔三、 <u>李晩奎</u>	東京 正則英語	朝鮮長老会
1916	羅樞建(男)	本科1年	平北雲山 1896年(20)	W.G.Cram <u>趙重応</u>	大東 法律専門	南監理会
	金亨植(男)	本科1年	江原鉄原 1891年(25)	M.B.Stokes、劉敬相 <u>韓寅洙</u> 、 <u>松本益吉</u>	平壤崇実中 ・光成小学 校の教師	南監理会
1917	李基淵(男)	別科1年	黄海黄州 1893年(24)	A.W.Wasson	開成韓英書院 (松都高等)	南監理会
1918	禹相用(男)	別科1年	京畿開成 1893年(25)		京城隆熙・ 高麗病院の 職員	南監理会
	金鐘萬(男)	別科1年	京畿江華 1892年(26)		培材学堂高 等科・長湍 教会伝道師	北監理会
	金恪九(男)	別科1年	江原杆城 1896年(22)	<u>松本益吉</u>	開成 松都高普	南監理会
	金珍珪(男)	別科1年	京畿長湍 1895年(23)	<u>松本益吉</u>	松都高普・ 光興の教師	南監理会
1921	具滋元(男)	別科1年	京城 1900年(21)		培材高普・ 中東学校教師	南監理会
	高在鳳(男)	別科1年	京城 1899年(22)	梁柱三	京城高普退学	南監理会
1922	金重煥(男)	別科1年	黄海谷山 1891年(31)	W.F.Bull 金弼秀	基督教青年 会中学科	朝鮮長老会
	金顕台(男)	別科1年	京畿江華	H.D.Appenzeller	培材高普・	北監理会

関西学院神学部における朝鮮人学生入学関係書類の分析 (1913-43)

			1895年(27)	劉敬相	興天女学校の教師	
1924	金鐘弼(男)	本科1年	京畿開成 1895年(29)	鄭春洙	松都高普	南監理会
	姜明錫(男)	本科1年	慶南馬山 1900年(24)	梁柱三、申在善	新光中学・南監理会伝道局	南監理会
	宋昌根(男)	本科1年	咸北慶興 1899年(25)	李載声、J.S.Gale	皮漁善聖書学院・勝洞教会の執事	北長老会
1925	宋昌松(男)	別科1年	平北熙川 1900年(25)	劉斗煥	熙川公立普通	北監理会
	鄭登雲(男)	別科1年	京畿江華 1901年(24)	A.W.Wasson J.V.Lacy 申洪植、金燦興	協成神学・徳積合一学校の教師	北監理会
	柳会韶(男)	本科1年	黄海平山 1906年(19)		松都高普・培英の教師	南監理会
	崔馬太(男)	本科1年	京畿開成 1903年(22)	呉花英 L.C.Brannon C.M.Weems	松都高普・光明の教師	南監理会
	鄭達元(男)	本科2年	平北寧辺 1905年(20)	劉斗煥 J.Z.Moore F.K.Gamble H.D.Appenzeller	培材高普・北鎮光東小学校の教師	北監理会
	李泰俊(男)	別科2年	平南平原 1889年(36)	E.J.O.Fraser	崇実専門学校	朝鮮長老会
	玄垣国(男)	別科2年	咸北城津 1889年(36)		延禧専門・永信小学校の校長	朝鮮長老会
1928	李龍九(男)	本科1年	黄海金川 1909年(19)	V.R.Turner 林斗華	松都高普	南監理会
	鄭達斌(男)	本科1年	平北寧辺 1909年(19)	W.E.Shaw 朴昌彬	平壤光成高普	北監理会
1929	張期洙(男)	本科1年	平北龍川 1906年(23)	李和春、李容政 張竹燮	松都高普・丘山校教師	南監理会
	李炯在(男)	本科1年	咸南定平 1906年(23)	李和春、梁柱三	松都高普・丘山校教師	南監理会

	金春培(男)	別科 1 年	京畿安城 1900年(29)	R.A.Hardie W.J.Anderson 朴容義	皮漁善 聖書学院・ 「基督申報」の記者	朝鮮 長老会
1930	朴泰鎮(男)	本科 1 年	咸南元山 1909年(21)	李寅涉	名古屋 享楽商業	在日 朝鮮教会
	林萬植(男)	本科 1 年	慶北迎日 1906年(24)	崔京学	大阪 北陽商業・ 貿易会社員	在日 朝鮮教会
	金英珠(男)	別科 2 年	咸北城津 1896年(34)	朴兌桓 A.M.Ross	中化中学・ 会寧教会の 伝道師	朝鮮 長老会
1933	李昌鎬(男)	予科 1 年	京畿高陽 1911年(22)	金鐘宇、金洙喆 E.M.Cable	養正高普	朝鮮 監理会
	洪顕嵩(男)	本科 2 年	平壤 1912年(21)	A.B.Chaffin	監理会神学	朝鮮 監理会
1934	趙華哲(男)		平南順川 1911年(23)	梁柱三、裴亨植	名古屋 東海商業・ 明星学校の 教師	朝鮮 監理会
1935	慮義善(男)	予科 1 年	平北鐵山 1911年(24)	朴贊斌	皮漁善 聖書学院	朝鮮 長老会
1936	朴子英(男)	本科 2 年	平南順川 1909年(27)	B.W.Billings	監理会神学	朝鮮 監理会
	韓世弘(男)	本科 2 年	平南江西 1911年(25)	B.W.Billings	監理会神学 東大門教会 の伝道師	朝鮮 監理会
	李浩彬(男)	本科聴講	平南江東 1898年(38)	趙華喆	監理会神学 イエス教会 中央宣教院 の院監	イエス教会
1937	金永雲(女)	予科 1 年	黄海海州 1915年(22)	李浩彬	海州公立高 等女学校・ 殷栗一道公 立普通学校 の教師	イエス教会
	李炳燮(男)	予科 1 年	黄海長湍	咸台永、金鍵	徹新中学	朝鮮

関西学院神学部における朝鮮人学生入学関係書類の分析（1913-43）

			1917年(20)	E.W.Koons		長老会
	李重夏(男)	予科1年	忠南公州 1911年(26)	福原田郎 伊藤秀治、J.B.Cobb	黄嶋山陽中学	日本 監理教会
	嚴堯燮(男)	本科1年	咸南文川 1916年(21)	B.W.Billings	咸興永生高普	朝鮮 長老会
	韓俊明(男)	本科1年	咸南元山 1907年(30)	李浩彬	恩真中学・ 中央宣道院 の福音使	イエス 教会
	金靈淳(男)	本科2年	平南平原 1903年(34)	B.W.Billings S.Hall.	監理会神学 療養教会牧師	朝鮮 監理会
	辺宗浩(男)	予科1年	平北宣川 1904年(33)	金洙喆	延禧専門	朝鮮 監理会
1938	金耀信(男)	予科1年	平壤 1917年(21)	朱基徹、衛藤克己	平壤 光成高普	朝鮮 長老会
	金千培(男)	選科1年	全南光州 1916年(22)	李敬弼 吉田源治郎	培材高普 修了	朝鮮 長老会
	張約翰(男)	本科2年	江原原川 1907年(31)	金鐘萬	監理会神学	朝鮮 監理会
	金容練(男)	本科2年	平南大同 1914年(24)	金鐘萬	監理会神学	朝鮮 監理会
1939	崔慶云(男)	本科2年	京畿開成 1907年(32)	金鐘宇、卞鴻圭	監理会神学 白川邑教会 の牧師	朝鮮 監理会
1940	池殷録(男)	予科1年	平北定州 1916年(24)	金元圭、柳百熙	松都高普	朝鮮 監理会
	金龍玉(男)	予科1年	平南江西 1922年(18)	朴泰鎮	平壤 光成中学	朝鮮 監理会
	車閔福(女)	本科2年	平南平原 1914年(26)	M.Whitehead 廣瀬ハマコ	大阪ランバス 女学院神学部	朝鮮 長老会
1941	南幸一(男)	予科1年	慶北盈徳 1915年(26)	全重煥	京阪 商業高校	在日 朝鮮教会
1942	金光(金) 相稷(男)	予科1年	平南龍岡 1920年(22)	朴子英	監理教 神学修学	朝鮮 監理会
	丹山(李) 順相(男)	予科1年	沙里院 1918年(24)	渡辺善太	東京 青山学院 神学部修学	朝鮮 長老会
	金山(金)	本科1年	平南中和	今村好太郎	神戸中央	朝鮮

	希栄 (男)		1914年 (28)		神学校修了	長老会
1943	月城 (李)	予科 1 年	慶北大邱	安田忠吉	京都	日本
	圭二 (男)		1923年 (20)		第一中学	基督教団
	富田 (李)	本科聴講	慶北大邱	神山信一郎	京都立命館	日本
	秋民 (男)		1919年 (24)		大学専門部 法科退学	基督教団
	廣田 (李)	予科 1 年	京畿廣州	井田健司	京都立命館	朝鮮
	勝男 (男)		1920年 (23)		夜間中学	長老会
	文村 (文)	予科 1 年	濟州	全家善人	大阪府立	朝鮮
	基成 (男)		1921年 (22)		農芸学校	長老会
	安田 (安)	予科 1 年	咸北慶興	岡原英夫	咸興永生中 学・大阪大 杉塾の教員	朝鮮 長老会
	貴垣 (男)		1920年 (23)			
	牧虎 (李)	予科 1 年	全南羅州	岡原英夫	大阪興国	在日
	順鳳 (男)		1917年 (26)		商業学校	朝鮮教会
	星村 (李)	予科 1 年	慶北漆谷	森田殷九、石幸正	施日新商業	日本
	徹男 (男)		1920年 (23)		大阪久保商 店職員	基督教団
	沈載哲 (男)	予科 2 年	京城	宇留賀政実	監理会神学 修了	朝鮮 監理会
	朴大善 (男)					

〔表2〕入学年度別朝鮮人学生氏名

年度	入 学 生
1913	韓石濬 金智煥 韓錫源
1914	金義衛
1916	羅樞建 金亨植
1917	李基淵
1918	禹相用 金鐘萬 金恪九 金珍珪
1921	具滋元 高在鳳
1922	金重煥 金顥台
1924	金鐘弼 姜明錫 宋昌根
1925	宋昌松 鄭登雲 柳会韶 崔馬太 鄭達元 李泰俊 玄垣国
1928	李龍九 鄭達斌
1929	張期洙 李炯在 金春培
1930	朴泰鎮 林萬植 金英珠
1933	李昌鎬 洪顯高
1934	趙華哲
1935	慮義善
1936	朴子英 韓世弘 李浩彬
1937	金永雲 李炳燮 李重夏 嚴堯燮 韓俊明 金靈淳 辺宗浩
1938	金耀信 金千培 張約翰 金容練
1939	崔慶云
1940	池殷録 金龍玉 車閔福
1941	南幸一
1942	金光(金)相稷、丹山(李)順相、金山(金)希栄
1943	月城(李)二、富田(李)秋民、廣田(李)勝男、文村(文)基成、 安田(安)貴垣、牧虎(李)順鳳、星村(李)徹男、沈載哲、朴大善

〔表3〕学科別朝鮮人学生

学 科		入 学 生							
本科	1 年	韓錫源 柳曾韶 林萬植	金義衡 崔馬太 嚴堯燮	羅樞建 李龍九 韓俊明	金亨植 鄭達斌 金山(金)希榮	金鍾弼 張基洙 姜明錫 李炯在	宋昌根 朴泰鎮		
	2 年	鄭達元 崔慶云	洪顯高 車閔福	朴子英	韓世弘 金靈淳	張約翰	金容鍊		
	聴講	李浩彬	富田(李)秋民						
別科	1 年	韓石濬 具滋元	金智煥 高在鳳	李基淵 李重煥	禹相用 金顯台	金鍾萬 宋昌松	金洛九 鄭登雲	全珍珪 金春培	
	2 年	李泰俊	玄垣國	金英珠					
予科	1 年	李昌鎬 池殷録 月城(李)圭二 牧虎(李)順鳳	盧義善 金龍玉 南幸一	金永雲 南幸一 廣田(李)勝雄	李炳燮 金光(金)相稷 丹山(李)順相 星村(李)徹男	李重夏 邊宗浩 基成	金耀信 安田(安)貴恒		
	2 年	沈載哲							
選科	1 年	金千培							
未詳		趙華哲							

〔表4〕出身地別朝鮮人学生

出身地	入 学 生							
京 城	具滋元	高在鳳	沈載哲					
京 畿	禹相用 李昌鎬	金鍾萬 崔慶云	全珍珪 廣田(李)勝雄	金顯台	金鍾弼	鄭登雲	崔馬太	金春培
江 原	金亨植	金洛九	張約翰					
忠 南	李重夏							
全 南	金千培	牧虎(李)順鳳						
慶 南	姜明錫							
慶 北	林萬植	南幸一	月城(李)圭二	富田(李)秋民	星村(李)徹男			
平 北	金智煥 邊宗浩	金義衡 池殷録	羅樞建	宋昌松	鄭達元	鄭達斌	張基洙	盧義善
平 南	韓石濬 金靈淳	韓錫源 金耀信	李泰俊 金容鍊	洪顯高 金龍玉	趙華哲 車閔福	朴子英 金光(金)相稷	韓世弘 金山(金)希榮	李浩彬
咸 北	宋昌根	玄垣國	金英珠	安田(安)貴恒				
咸 南	李炯在	朴泰鎮	嚴堯燮	韓俊明				
黄 海	李基淵	李重煥	柳曾韶	李龍九	金永雲	李炳燮	丹山(李)順相	
濟 州	文村(文)基成							

〔表5〕年齢別朝鮮人学生

年齡	入 學 生							
18 才	金龍玉							
19	韓錫源	金義衡	柳曾韶	李龍九	鄭達斌	沈載哲		
20	羅樞建	鄭達元	李炳燮	月城(李)	圭二			
21	金智煥	具滋元	朴泰鎮	洪顯高	嚴堯燮	金耀信		
22	金洛九	高在鳳	崔馬太	李昌鎬	金永雲	金千培	金光(金)相稷	
	文村(文)基成							
23	全珍珪	張基洙	李炯在	趙華哲	廣田(李)	勝雄	安田(安)貴恒	
	星村(李)徹男							
24	韓石濬	李基淵	姜明錫	鄭登雲	林萬植	盧義善	金容鍊	池殷録
	丹山(李)順相		富田(李)秋民					
25	金亨植	禹相用	宋昌根	宋昌松	韓世弘			
26	金鍾萬	李重夏	車閔福	南幸一	牧虎(李)順鳳			
27	金顯台	朴子英						
28	金山(金)希榮							
29	金鍾弼	李泰俊	金春培					
30	韓俊明							
31	李重煥	張約翰						
32	崔慶云							
33	邊宗浩							
34	金英珠	金靈淳						
36	玄垣國							
38	李浩彬							

〔表6〕男女別朝鮮人学生

性別	入 学 生							
男	韓石濬	金智煥	韓錫源	金義衡	羅樞建	金亨植	李基淵	禹相用
	金鍾萬	金洛九	全珍珪	具滋元	高在鳳	李重煥	金顯台	金鍾弼
	姜明錫	宋昌根	宋昌松	鄭登雲	柳曾韶	崔馬太	鄭達元	李泰俊
	玄垣國	李龍九	鄭達斌	張基洙	李炯在	金春培	朴泰鎮	林萬植
	金英珠	李昌鎬	洪顯高	趙華哲	盧義善	朴子英	韓世弘	李浩彬
	李炳燮	李重夏	嚴堯燮	韓俊明	金靈淳	邊宗浩	金耀信	金千培
	張約翰	金容鍊	崔慶云	池殷録	金龍玉	南幸一	金光(金)	相稷
	丹山(李)	順相	金山(金)	希榮	月城(李)	圭二	富田(李)	秋民
	廣田(李)	勝雄						
	文村(文)	基成	安田(安)	貴恒	牧虎(李)	順鳳	星村(李)	徹
	沈載哲							
	金永雲	車閏福						
女								

〔表7〕教派及び教団別朝鮮人学生

区 分		入 学 生							
	南 監理 (1930 年以前)	羅樞建	金亨植	李基淵	禹相用	金洛九	全珍珪		
		具滋元	高在鳳	金鍾弼	姜明錫	柳曾韶	崔馬太		
		李龍九	張基洙	李炯在					
	北 監理 (1930 年以前)	韓錫源	金鍾萬	金顯台	宋昌松	鄭登雲	鄭達元		
		鄭達斌							
	基督教 朝鮮監理会 (1930 年代以後)	李昌鎬	洪顯高	趙華哲	盧義善	朴子英	韓世弘		
		金靈淳	邊宗浩	張約翰	金容鍊	崔慶云	池殷録		
		金龍玉	金光(金)	相稷	沈載哲				
朝鮮 耶蘇教 長老会		韓石濬	金智煥	金義衡	李重煥	宋昌根	李泰俊		
		玄垣國	金春培	金英珠	李炳燮	嚴堯燮	金耀信		
		金千培	車閏福	金山(金)	希榮	廣田(李)	勝雄		
		文村(文)	基成	安田(安)	貴恒				
イエス教会		李浩彬	金永雲	韓俊明					
朝鮮基督教会		丹山(李)	順相	富田(李)	秋民				
日本 基督 教会	在日朝鮮人教会	朴泰鎮	林萬植	南幸一	牧虎(李)	順鳳			
	日本監理教会	李重夏							
	日本基督教団	月城(李)	圭二	星村(李)	徹男				

〔表8〕推薦人別朝鮮人学生

区 分		推 薦 人
朝鮮人	南監理教牧師	梁柱三（南監理牧師、朝鮮監理会総理師） 劉敬相（南監教会伝道師、関西学院卒業生） 林斗華（南監理教 牧師、松都高等普通学校校長） 金元圭（開城南部教会 牧師） 吳華英（開城北部教会 牧師） 柳百熙（開城地方 監理師） 李容政（間島地方 牧師） 李和春（間島地方 監理師） 張竹燮（間島地方 牧師） 鄭春洙（開城北部教会 牧師） 趙華喆（関西学院 学生） 韓寅洙（春川教会 牧師）
	北監理教牧師	金鍾萬（監理会神学校 教授、関西学院 卒業生） 朴子英（龍岡徳洞教会 牧師、関西学院 卒業生） 金洙喆（孔徳教会 牧師） 金鍾宇（京城地方 監理師） 金燦興（仁川地方 監理師） 朴昌彬（球場教会 牧師） 朴泰鎮（光成中学校 牧師） 裴亨植（東満州地方 監理師） 卞鴻圭（監理会神学校 校長） 申洪植（仁川内里教会 牧師） 劉斗煥（北鎮教会 牧師） 崔炳憲（貞洞教会 牧師）
	長老派牧師	金鍵（徽新学校 教師） 金弼秀（長老教 牧師） 朴容義（勝洞教会 牧師） 朴贊斌（平北老会長） 朴兌恒（長老教 牧師、咸北老会長） 李敬弼（光州錦町教会 牧師） 李載馨（河橋教会 牧師） 朱基徹（平壤山亭峴教会 牧師） 咸台永（蓮洞教会 牧師）
	イエス教牧師	李浩彬（イエス教会中央宣道院 院監、関西学院 卒業生）
	在日朝鮮人 牧師	李寅涉（名古屋朝鮮基督教会） 全重煥（日本基督教豊崎教会） 朱孔三（東京朝鮮人教会） 崔京學（京都朝鮮人教会 牧師）
	その他 （身元保証）	趙重應（子爵、大東法律専門學校 校長） 申在善（馬山居住） 李晩奎（朝鮮留学生監督 囑託）
	外国人 宣教師	A.W. Wasson（協成神学校長） C.M. Weems（開城 宣教師） F.K. Gamble（開城 宣教師） J.B. Cobb（京城 宣教師） L.C. Brannon（春川 宣教師） M.B. Stokes（春川 宣教師） R.A. Hardie（「基督申報」社長） V.R. Turner（南監理 宣教師） W.G. Cram（協成神学校 教授）
	北監理教	A.B. Chaffin（監理会神学校 副校長） B.W. Billings（監理教神学校長）

		E.M. Cable (延禧専門学校 教授) H.D. Appenzeller (培材高普 校長) J.V. Lacy (北監理宣教部) J.Z. Moore (平壤 宣教師) S. Hall (海州 宣教師) W.E. Shaw (公州 宣教師)
	北長老派	E.W. Koons (敎新学校 校長) J.S. Gale (敎新学校 校長) W.J. Anderson (皮漁善聖書学院 校長)
	カナダ長老派	A.M. Ross (城津 宣教師) E.J.O. Fraser (咸興 宣教師)
	南長老派	W.F. Bull (群山 宣教師)
	在日宣教師	M. Whitehead (ランバス女学院 神学部長)
日本教会 牧師		全家善人 (日本基督教団 大阪東成教会 主管者) 吉田源治郎 (日本基督教大阪イエス団教会 主任) 岡原英夫 (大阪宝塚監理教会 主管者) 廣瀬ハマコ (ランバス女学院) 今村好太郎 (神戸中央神学校長) 伊藤秀治 (大阪) 渡邊善太 (青山学院神学部長) 福原田郎 (広島東部教会 牧師) 森田殿九 (日本基督教団大阪支教区長) 石幸正一 (日本基督教団龍華教会 牧師) 松本益吉 (兵庫県 教師) 井田建司 (京都西京教会 牧師) 神山信一郎 (京都加茂川教会 牧師) 安田忠吉 (京都九太町教会 牧師) 宇留賀政實 (日本基督教朝鮮教区長) 衛藤克己 (日本基督教会 幹事長)

〔表 9〕最終卒業学校別朝鮮人学生

区 分	入 学 生
小（普通）学校	禹相用
中（高等普通）学校	韓石濬 金智煥 金亨植 李基淵 金鍾萬 金洛九 全珍珠 具滋元 高在鳳 李重煥 金顯台 金鍾弼 姜明錫 柳曾韶 鄭達元 李龍九 鄭達斌 張基洙 李炯在 金英珠 李昌鎬 金永雲 李炳燮 李重夏 韓俊明 金耀信 金千培 池殷録 金龍玉 丹山(李) 順相 金山(金) 希榮 月城(李) 圭二 富田(李) 秋民 安田(安) 貴恒
実業学校(商業・農業)	朴泰鎮 林萬植 趙華哲 車閔福 南幸一 文村(文) 基成 牧虎(李) 順鳳 星村(李) 徹男
聖書学院(高等聖書学校)	宋昌根 金春培 盧義善 廣田(李) 勝雄
神 学 校	宋昌松 鄭登雲 洪顯高 朴子英 韓世弘 李浩彬 金靈淳 張約翰 金容鍊 崔慶云 金光(金) 相稷 沈載哲
大学（専門学校）	韓錫源 金義衡 羅樞建 崔馬太 李泰俊 玄垣國 嚴堯燮 邊宗浩

〔表 10〕身分及び職業別朝鮮人学生

区 分	入 学 生
学 生	金義衡 羅樞建 李基淵 金洛九 金鍾弼 宋昌根 宋昌松 李龍九 鄭達斌 朴泰鎮 李昌鎬 洪顯高 盧義善 朴子英 李炳燮 李重夏 嚴堯燮 邊宗浩 金耀信 金千培 金容鍊 池殷録 金龍玉 車閔福 南幸一 金光(金) 相稷 丹山(李) 順相 金山(金) 希榮 月城(李) 圭二 富田(李) 秋民 廣田(李) 勝雄 文村(文) 基成 牧虎(李) 順鳳 沈載哲
牧 師	韓石濬 金鍾萬 金英珠 韓世弘 韓俊明
伝 道 師	李浩彬 金靈淳 崔慶云
職業人	教 師 金智煥 韓錫源 金亨植 全珍珠 具滋元 金顯台 鄭登雲 柳曾韶 崔馬太 鄭達元 玄垣國 張基洙 李炯在 趙華哲 金永雲 張約翰 安田(安) 貴恒
	キリスト教機関 李重煥 姜明錫 金春培
	一般機関 禹相用 高在鳳 李泰俊 林萬植 星村(李) 徹男

戦前・戦時下の関西学院における東アジアからの留学生の調査研究は、これまでの課題となっていた。学院史に所蔵されている資料から、戦前・戦時下に神学部で学んだ現在の韓国、中国、台湾からの留学生は、九〇名近くを数えている。学院史編纂室の共同研究の枠組みにおいて、「関西学院における外国人留学生の調査研究―戦前・戦時下の神学部を中心に―」というテーマで、二年前より最も多い韓国人留学生の調査研究に着手してきた。その共同研究は、多くのアジアからの留学生が日本で学ぶに至った歴史的背景を踏まえながら、在学中どのような内容の勉学をされ、またどのような学生生活を送られたのか、そしてそれぞれ本国に帰国されて以降どのような働きをされたのかを可能な限り解明することを目的としている。

特にこの問題に深い関心を示しておられる韓国メソジスト神学大学教授で、韓国の歴史神学者として高名な李徳周教授と、これまで二回の学術交流セミナーが開催された。

第一回の学術交流セミナーは、二〇〇八年四月四日に韓国メソジスト神学大学の一〇〇周年記念館において開催された。セミナーでは、李教授による講演「関西学院神学部の韓国人学生たちの牧会と神学活動」(「関西学院史紀要」第十五号二〇〇九年三月に掲載)と筆者による講演「関西学院の神学教育の特色と外国人留学生―戦前・戦時下を中心として―」を中心に豊かな学術交流が行われた。

さらに第二回の学術交流セミナーは、同年の十一月一七日に関西学院会館ベーツチャペルにおいて学院史編纂室の主催で開催された。セミナーでは、李教授による講演「関西学院神学部における朝鮮人学生入学書類の分析―信仰告白と入学動機を中心に―」と筆者による講演「関西学院神学部における学生生活―戦前・戦時下を中心として―」を中心に充実した共同研究がもたれた。そのセミナーにおける李教授の講演内容が、ここに掲載した論文である。本稿を翻訳して下さった本学神学部非常勤講師の朴賢淑氏に感謝したい。

二回の学術セミナーにおいて、李徳周教授の大変友好的で真摯な学術的貢献により、これまで課題であった戦前・戦時下における神学部の韓国人留学生の全容の解明がなされたことに対して心より感謝をいたしたい。このような共同研究がその歴史研究を通して、これからの関西学院と韓国をはじめ東アジア諸国との平和的友好関係に多少なりとも貢献することができることを願ってやまない。

☒

(神田健次)